

授業概要

日本における漢詩の制作が本格化したのは七世紀後半まで遡るとされるが、古代の日本人は中国詩の表現や発想を学び、模倣することで漢詩を作った。平安時代初期には『凌雲集』『文華秀麗集』『経国集』という勅撰三集が作られるが、時代の流れの中で徐々に模倣から脱却し、自己の感情を表現するようになる。この授業では平安時代の漢詩を年代順に取り上げ、読解することで、日本の漢詩が中国の古典籍をいかに受容し、展開していったか、日本漢詩が成熟化していく過程について講義する。

授業計画

第1回	平安時代の漢詩概説
第2回	嵯峨天皇の漢詩を読む① 帝王の詩
第3回	嵯峨天皇の漢詩を読む② 君臣唱和
第4回	空海の漢詩を読む
第5回	島田忠臣の漢詩を読む
第6回	菅原道真の漢詩を読む① 讃岐守時代まで
第7回	菅原道真の漢詩を読む② 栄達と左遷
第8回	紀長谷雄の漢詩を読む
第9回	大江朝綱の漢詩を読む
第10回	菅原文時の漢詩を読む
第11回	一条天皇の漢詩を読む
第12回	藤原道長の漢詩を読む
第13回	大江匡衡の漢詩を読む
第14回	大江匡房の漢詩を読む
第15回	藤原忠通の漢詩を読む
第16回	筆記試験

到達目標

漢詩の鑑賞を通して、漢詩の基礎知識や平安時代の漢詩の大まかな流れ、代表的な詩人について理解を深めることが目標である。

履修上の注意

授業ではプリントを使うため、履修者は毎回出席してメモをとること。また、授業毎にリアクションペーパーの提出を課すため、しっかり授業を聞いて記入すること。遅刻や私語については受講態度から減点する。

予習・復習

授業後には資料やメモの整理など必ず復習を行い、筆記試験に備えてほしい。

評価方法

受講態度30%と筆記試験70%によって総合的に判断する。

テキスト

プリントを配布する。また、参考文献については授業内で適宜紹介する。